

2026年8月23日（日）第567回・ボイスキュー「グラウンドワーク三島・アクショントーク」三島の水資源の現状と市民の意識改革の必要性

活動報告・水資源提言

「水の都」三島の真実：34年の実績と水資源の危機的依存構造

NPO法人グラウンドワーク三島・渡辺豊博氏による戦略的活動と市民への警鐘

圧倒的評価を勝ち取る「謙虚にして図々しい」戦略

評価を決定づけるプレゼンの極意
自らの功績を誇示せず、淡々と「事実を積み上げたピラミッド」を見せる。現場の苦労話よりも、創造性・先駆性・革新性を強調し、他団体との圧倒的な差別化を図る。

創造的再生：イギリスの定義に倣い、単なる原状回復ではなく「水の中を歩ける」等の新しい価値を付加することこそが真の創造活動である。

AWARD SUCCESS

34 / 34

34年間で34の主要賞を獲得
申請却下はほぼ皆無

三島市水道水源の現状：100%市外依存の脆弱性

「水の都」でありながら、上水道水源の全てを市外に依存している構造的リスク。

1日総給水量

78,000t

伊豆島田浄水場 (裾野市): 4.8万t

県営駿水水道 (清水町): 3.0万t

最大のリスク：水源地の法規制欠如
水源地である裾野市には地下水規制条例が存在しない。企業による無制限の掘削・取水が理論上可能であり、三島の水供給は将来的に極めて脆弱である。

熱海への送水コスト（電気代等）も三島市民が負担している構造的課題がある。

富士山：巨大な天然フィルター

富士山は溶岩と火山砂等が層をなす「巨大なスポンジ」。年間2,860mmの降雨を浄化し蓄える。

1日あたりの湧水量

534万t

東京ドーム4.3杯分

潜在供給能力

1,340万人分

日本人口の約1割

三島の水の「100点満点」スペック

蒸発残留物	120 (理想値)	硬度 (軟水)	58 (最適)
水温	18℃ (冷涼)	残留塩素	0.29 (低刺激)

「当たり前という幻想に甘えていないか」
富士山と周辺自治体への感謝を持ち、危機意識を持つべきである。

本ラジオ番組では、NPO 法人グラウンドワーク三島の渡辺豊博氏が、団体の活動報告と数々の賞を獲得してきた独自の戦略を語ります。

続けて、三島市の水資源の現状について深く掘り下げ、水道水が市外の水源地に大きく依存している事実を具体的なデータで示し、「水の都」としての自覚を持ち、水資源への感謝と危機意識を持つことの重要性を市民に強く訴えかけています。

NPO の活動報告と受賞戦略

グラウンドワーク三島は、34年間で34の大きな賞を受賞し、申請が却下されたことはほとんどありません。

昨年のグッドデザイン賞では6300件中の2位という高評価を得るなど、その実績は際立っています。

この成功の背景には、単なる活動報告に留まらない巧みな戦略が存在します。渡辺氏はプレゼンテーションにおいて、自らの功績を声高に主張するの

ではなく、淡々と事実を積み重ねた結果としてピラミッドができていた、というような「謙虚にして図々しい」語り口の重要性を強調します。

現場での苦労話（例：6時間草を刈った等）を繰り返すだけでは審査員の心には響かず、創造力や先駆性、革新性を訴えることが他との差別化に繋がると語ります。

また、イギリスでは新築ではなく「古いものを新しく蘇らせ、再生すること」こそが「創造活動」と定義されているという視点を紹介。

源兵衛川の再生は、単なる原状回復ではなく、かつては無かった「水の中を歩ける」という新しい価値を付加した創造活動であると位置づけています。この考えに基づき、今回も「土木学会デザイン賞（境川・清住緑地）」と「日本自然保護大賞」への申請書を執筆。写真などを活用して活動の前後を劇的に見せる「ペンの力」で審査員に訴えかけることの重要性にも触れています。

さらに、これらの受賞は単発的なものではなく、賞の狙いを分析し、3～5年という長期的な事業計画と連動させて戦略的に準備を進めた結果であると明かしました。

三島市の水道水源の現状と依存構造

「水の都」として知られる三島市ですが、市民が日常的に利用する上水道の水源は、その大部分を市外に依存しているという実態が明らかにされました。

三島市の1日の総給水量は約7万8000トンに上りますが、その内訳は、裾野市にある伊豆島田浄水場から約4万8000トン、清水町の柿田川を水源とする県営駿豆水道から約3万トンと、すべて市外の水源で賄われています。市内に飲用に足る大規模な水源はほとんど存在しないのが現状です。

さらに、三島市も一部を構成する県営駿豆水道は、熱海市へ1日6万トン、三島市へ3万トン、函南町へ1万トンを供給する広域事業です。

このため、三島市民は山を越えて熱海へ水を送るための電気代なども含めた高いコストを負担しているという構造的な課題も指摘されました。

最も大きなリスクは、水源地である裾野市には、三島市や沼津市、清水町にあるような厳格な「地下水規制条例」が存在しない点です。

これにより、理論上は土地を購入した企業などが自由に井戸を掘削し、大量の地下水を取水することが可能であり、三島市の水供給が将来的に脅かされる脆弱性を抱えています。この事実から、市外の水資源に生かされているという現状を市民が認識し、感謝と危機感を持つべきだと警鐘を鳴らしています。

富士山がもたらす水資源の恩恵と科学的背景

三島市が依存する豊富な水資源の供給元は、紛れもなく富士山です。

富士山は度重なる火山活動によって、水を通しやすい火山砂、火山礫、火山弾と、水を通しにくい溶岩が **20～30** メートルの層をなして重なり合う、巨大なスポンジのような地層構造をしています。

この地層が天然の巨大なフィルターとして機能し、膨大な雨や雪を浄化しながら地下に蓄えています。有名な白糸の滝も、崖の上から水が落下しているのではなく、このスポンジ状の地層から湧き出た水が集まって滝のように見えている現象です。

富士山には日本の平均降水量 **1700mm** を大きく上回る年間約 **2860mm** の雨が降り注ぎます。

この降水量がもたらす湧水量は、1日あたり約 **534** 万トンにも達し、これは東京ドーム **4.3** 杯分に相当します。

この水量は、1人あたり1日 **400** リットル使用すると仮定した場合、実に **1340** 万人分、つまり日本の総人口の1割以上を賄えるほどの潜在能力を秘めています。

まさに富士山は「水の山」であり、我々の生活を支える巨大な「水瓶」なのです。このスポンジとフィルターという二重の恩恵により、下流の我々は清浄な水を得ることができています。

三島の水の水質的優位性と市民への警鐘

三島市の水道水は、科学的な指標から見ても極めて「おいしい水」であることが証明されています。

水の味を左右するミネラル含有量を示す「蒸発残留物」は、適正值 **30～200mg/L** に対し、伊豆島田浄水場の水は理想的な中央値である「**120**」。

味の癖に関わる「硬度」も、適正值 **10～100mg/L** に対し「**58**」と、まさにど真ん中のバランスを誇る軟水です。

さらに、おいしさの条件とされる「水温」は **20** 度以下が望ましいところ「**18** 度」を保ち、殺菌のための「残留塩素」も、基準値 **0.4** 以下のところ「**0.29**」と、安全性を確保しつつ味を損なわない絶妙な値に抑えられています。

このように、全ての項目で **100** 点満点ともいえる高品質な水を、他市町の水源に頼って得ているのが三島の現状です。

それにもかかわらず、足元の貴重な湧水地を潰し、全国平均よりも多い量の水を贅沢に使い続けている市民の姿勢に対し、渡辺氏は「当たり前という幻想に甘えているのではないか」と厳しく指摘。

水道事業が水の消費に依存するという会計上の皮肉な構造に触れつつも、富士山や周辺自治体への感謝の気持ちを持ち、水に対する危機感と意識改革の必要性を強く訴えかけました。